



写真1 プラスティネーション標本



写真2 埼玉県内で捕れたウナギ

かわはく No.36

CONTENTS

平成21年度秋期企画展「川と海を旅する魚たち」開催報告2

かわはく体験講座からの報告4

今年度の「自然観察ウォーク」報告.....5

平成21年度博物館実習のご報告6

春期企画展のお知らせ.....7



平成21年度秋期企画展

「川と海を旅する魚たち」開催報告

開催期間：平成21年9月26日(土)～11月23日(月)

当企画展は、川と海を行き来する魚、いわゆる回遊魚が主役となります。その中でも広く知られているサケ、アユ、ウナギにスポットを当てています。回遊魚はまさしく川と海を行き来する長い旅をしますが、その生態はいまだ謎も多く、興味深いものがあります。

●第二展示室

サケ、アユ、ウナギは私たちにもなじみの深い食材であることから、はじめは食の視点で展開します。メイン会場である第二展示室入口の大きな暖簾をくぐると、レストラン等でよく見られる食品サンプル模型で回遊魚を素材とした代表的な料理が紹介されています。併せて、例えばサケは、おにぎりや弁当だけでなく、頭から尻尾まで余すところなく様々な料理になる様子をCGや映像を駆使してわかりやすく学べるコーナーとなっています。

また、食との関連として水産物を扱う最前線を紹介しました。キーマンである現場のプロを取材し、漁港、養殖場、魚市場などの様子をスライドショーやパネルで紹介する展示です。トロ箱や桶など現在使用されている道具で演出をしています。

もうひとつ、食との関連で「日本の缶詰はサケ缶からはじまった」と銘打ち、缶詰メーカーの協力も得て、大正時代の復刻版ラベルなど様々なサケの缶詰を展示しました。明治初期に始まったサケの缶詰生産は120年以上の歴史を誇り、代表的な缶詰製品といえるでしょう。

食材としてなじみ深い一方で、回遊魚の一生や体のつくりなど詳しいことに触れる機会は少ないと考えられます。そこで旅のルートや成長過程、餌などの生態や、解明されていない謎や研究の成果についてはパネルなどで紹介しています。また、サケのウロコの拡大模型や、生きている状態により近づいた標本である「プラスチック標本」ではサケ、アユ、ウナギに加え、サケは内臓、

卵、仔稚魚についても展示し、魚体の比較や内臓の部位がわかりやすく学習できるように展開しています。

さらに河川環境と回遊魚の関係についての展示をおこないました。昨今、回遊魚はダムや堰などによって、川をのぼれなくなっている事態が表面化しています。産卵場や成長するための重要な餌場へ到達できないなど大きな問題です。しかし、飲料水や農業用水など人々の生活のためには必要な面もあり、これらを両立し川のつながりを取り戻す魚道などの研究成果を紹介しました。

埼玉県内に関する展示として、荒川流域でかつて盛んにおこなわれたウナギ漁について、さまざまな漁具を紹介しました。中でも特徴的なのは、「ウナギ搔き」と呼ばれる漁具で、引っかける鎌のような道具に長い柄が付いています。泥の中に潜むウナギを搔いて獲る漁に使われていました。



大きな暖簾の第二展示室入口



第二展示室内の様子



水産現場についての展示物



ウロコ再現模型展示物



プラスティネーション標本



かつて荒川で使われた漁具

●リバーホール展示

リバーホールにおいては埼玉県産天然ウナギの生体展示をおこないました。子どもたちからは、「生きているウナギを初めて見た」「結構かわいい顔」などの声も聞かれ、好評でした。また、ウナギ水槽の隣には回遊魚にまつわる話や感想など自

由に書いてもらうメッセージボードを設置しました。面白い記述もあり、たくさんのメッセージで埋め尽くされた人気のコーナーでした。



リバーホール展示

●荒川情報局展示

図書と情報コーナーである荒川情報局においても展示をおこないました。当館所蔵である1942年刊行の松下高・高山謙治著『鮭鱒聚苑』やサケのなめし革やウナギの皮財布などを紹介しました。

●関連イベント

関連事業として、10月25日には武蔵水路沿いを歩き、利根大堰（行田市）に至り、遡上するシロザケを観察するウォーキングイベントもおこなわれました。例年は11月がピークの様ですが、数多くの遡上が観察され、利根導水総合事業所の施設見学もおこなわれました。



利根大堰でのサケ遡上観察会の様子

●巡回展として他館でも開催

なお、当企画展は河川という学習テーマや、展示などの教育メディアデザイン、博物館運営に関心のある研究グループ、「水辺の教育メディア研究会」が企画・制作に携わりました。また、巡回展として、札幌市豊平川さけ科学館、佐賀県立宇宙科学館、岐阜県博物館など今後全国の博物館で開催されます。（研究交流部 藤田宏之）



かわはく体験講座からの報告

かわはく体験講座「荒川の帰化植物と土壌環境」を終えて

かわ博の自然状態にある河川敷において、天候に恵まれ、野外での体験講座が気持ち良く行えました。講座の目的は、日頃目にしない足下の土壌の世界と地表の特に繁茂している帰化植物との関係を観察することで、自然保護の目を養ってもらうことにありました。内容が多少専門的すぎたのか参加希望者は少なく2人でした。担当は、土壌環境を平山が、植物を笹原でした。



「荒川の帰化植物と土壌環境」実施風景

I) 導入 帰化植物とは何か？

有史以前帰化のオオバコ、江戸～明治に帰化したクローバ、帰化ではないが自生地からはなれている高麗芝を材料に帰化植物についての話。これらの繁茂しているファミリー広場の土壌の硬さをスコップで実感し、海に囲まれている日本と陸続きの国の考え方とか帰化という英単語がないことを説明しました。

II) 展開1 森林下での帰化植物の進入度合いについて

帰化植物であるが河畔林として成立しているニセアカシア林で、戦後の帰化植物であるオオバコクサがどのようにして林の縁に成立するかを観察させ、あわせて林下の土壌を掘って観察しました。林下の土壌は、河川堆積物が厚く積もり地味が良

くふかふかの土壌で、帰化植物より日本在来の植物が優先繁茂している状況を解説。さらにニセアカシアなどの木本系の帰化植物の話と戦後帰化したオオバコクサ、セイタカアワダチソウの話をして、土地が人為的または汜らんなどで攪拌されると、帰化植物が進入繁茂するメカニズムを解説しました。

III) 展開2 荒川河川敷における帰化植物について

洪水時以外に水がない河川敷に足をのぼす。そこは、クズとアレチウリが一面繁茂しています。クズは日本の植物ですが、北アメリカに帰化し、コントロールが難しいやっかいな植物となっている事を説明。土壌を掘らせて、砂利のみで堅く普通の土壌ではない事を説明しました。こういうところでは、環境が厳しいだけに、普通の植物は生育しにくい。ツル性の植物は土壌が良いところに根を置き、ツルを伸ばして表面の空間を占領していく戦略について説明した。

IV) 結論 土壌環境が違えば、帰化植物も違ったモノが生える。

有史以前の帰化植物は、現在、在来の植物となんのトラブルもなく共に生育しています。生態を人間が破壊した場所や河川敷のように土壌環境が不安定なところには、土壌環境に対応した帰化植物が占領していることがわかりました。

川の博物館では、立地環境をもっと有効な教材として利用し、自然保護などの体験学習を進めていけたらと思っています。

(研究交流部 平山良治 交流員 笹原 星)

かわはく体験講座「荒川の石の調べ方」実施報告

9月20日(日)に、かわはく体験講座「荒川の石の調べ方」を行いました。5連休の中日ということもあり、かわはくもかわせみ河原も人で大いにぎわう中での体験講座でした。

参加者は10名とやや少なかったものの、みなさん石や地学が大好きという方達ばかり。ちょっと難しい岩石学の話や、荒川流域の地質の話なども、熱心に耳をかたむけて下さいました。

まず石の分類と成因の話を講座室で行ったあと、かわせみ河原へ。川原にある石の種類は、川によって異なります。「じゃあ、荒川にはどんな種類の石が多いんだろう？」という疑問を解決するために、石を集めて観察。「荒川には、堆積岩と変成岩が多い。火山起源の石はほとんどない」という結論に、みなさん関心することしきり。

「では、どうして荒川にある石の種類には偏りがあるのでしょうか？」という新たな疑問には、荒

川大模型173が活躍です。川原の石は、上流から流されてやってきます。荒川の上流域を実際に見に行くのは大変ですが、荒川大模型173では荒川がどんなところを流れてくるのかをすぐに見ることができます。



「荒川の石の調べ方」実施風景

石の名前を覚えるだけでなく、「どんな由来を持つ石なのか」、「どうしてそこにあるのか」を考える。そんな体験講座になったと思います。ただ転がっているように見える石にも、そこに至るまでのドラマがあることを、みなさんが感じてくれていたら幸いです。(研究交流部 小林まさ代)



今年度の「自然観察ウォーク」報告

自然観察ウォークの実施

川の博物館で自然観察ウォークを始めて、丸1年が経ちました。かわはくの記念イベント（春まつりやGWなど）で午前午後の2回実施し、延べ154名の参加者に恵まれました。GWは4日間ごとにテーマを決め、ガイドをするだけの観察会にならないように参加者が参加しやすいようにワークシートを作成し工夫をしました。

たとえば、博物館の展望台に落ちている糞を探し、糞の持ち主を探し出す観察ウォーク、テントウムシを観察し、模様をひたすら、集める観察ウォークなど楽しみながら自然を理解できるように実施できたと思います。

生き物の名前を知ることよりも、普段見ている自然にちょっとでも興味を持ってもらい「へ～、ほ～」と言いながら、楽しんでもらえることを重

視しています。自然を知る第一歩を踏み出す後押しができれば、さらには、観察ウォークをとおして将来の学芸員が生まれたいいなと思っています。

(研究交流部 石井克彦)



自然の色さがし

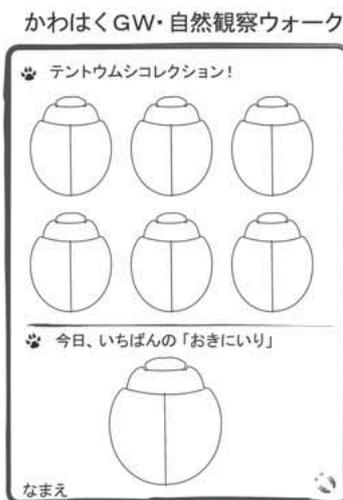


さあ、なにが見つかるかな？



テントウムシの観察

自然観察ウォークの様子



◀使用したワークシート



平成21年度 博物館実習のご報告

川の博物館では今年の夏、7日間にわたって博物館実習の受け入れを行いました。今年度は7大学から計8名の大学生が、学芸員資格の取得を目指して参加してくれ、夏休み突入直後、かわはく夏祭りを含めたイベント目白押し、博物館が1年で最も忙しい時期に、当館のスタッフと協力しながら奮闘していただきました。

今年度の実習カリキュラムは、講座の準備と実施の手伝い、スロープ展「川と宝石」に使用する展示物の制作ならびに展示、写真撮影実習、当館で実施している教育普及事業の疑似体験、第一展示室の展示替えなど、その内容は多岐にわたりました。

また、今年度の実習カリキュラムの中で、昨年度までとは大きく異なり、特に研究交流部スタッフと実習生が一致団結して実施したのが、実習最終日に行った「水の日記念イベント」の主催というカリキュラムでした。これは他のカリキュラムでは指導側という立場に立つ研究交流部スタッフが実習生のサポート側に入るといった形をとり、実習生が1週間の実習期間中に経験したことをいかにしながら、イベントの企画から準備、その実施にいたる一連の過程を一通り経験してもらおうとい

う趣旨のカリキュラムでした。

企画段階では、普段我々スタッフが考えもつかないような意見が飛び出したり、準備段階では、なかなか自分たちが思い描いたとおりにはいかずに苦労したり、実施段階では、あいにく雨という天候になってしまったりと、山あり谷ありのイベントになってしまいましたが、実習生にとっては1つのイベントをやることの難しさと楽しさというものを感じ取ってもらえたと思いますし、また当館のスタッフにとっては新しい意見が取り入れられることで、当館の今後のイベントがより充実したものへと変えていくことができる足掛かりになったのではないかと思います。

今回の実習で行ったことは、博物館の業務全体を見るとほんのわずかだったかもしれませんが、こうした経験を今後何らかの形でいかしていただければ幸いと考えております。今年度の博物館実習のように、川の博物館の多様な側面を知ってもらうため、そして将来博物館で働きたいと考えている人に博物館での仕事を体験してもらうためにも、来年度以降も引き続き力を入れて博物館実習に取り組んでいきたいと思っています。

(研究交流部 羽田武朗)



夏祭りのお手伝いの様子



水の日記念イベントの様子



春期企画展のお知らせ

ボタニカルアート・太田洋愛の桜原画展—荒川ゆかりの桜を中心に—
平成22年3月16日(火)～5月9日(日)

ボタニカルアート（植物画）は、写真のない時代に、植物学者と画家がペアを組み、学術的に正確な絵図として描かれました。それは植物の持つ正確な姿を美しく描写する植物画であり、言わば学術としての「知」と絵画としての「美」を併せ持ちます。

太田洋愛氏（1910 - 1988）は、日本のボタニカルアートの先駆者的存在で、その植物画を知らず知らずの間に目にされた人も多いのではないのでしょうか。太田氏は戦後改訂された小・中学校理科教科書の植物挿絵の多くを描き、「日本産欄花植物図譜（誠文堂）」、「園芸植物図譜」（平凡社）の原画など、多数の植物画を残しました。また「日本ボタニカルアート協会」の創立委員でもあります。

この企画展では春の桜の季節に合わせ、太田洋愛氏の桜原画展を開催します。桜は古くから日本人に愛でられ、多くの品種が栽培されましたが、第二次世界大戦から終戦後にかけて、多くの桜が衰退してしまいました。これを嘆いた人々は各地で桜復興に力を注ぎましたが、太田氏もその一人と言えるかもしれません。著書「さくら」（日本書籍）には“しかし、これらの桜の多くの品種名を調べるのには、むかしの数少ない文献や図譜類

を頼るのみで、誰もが分かるような桜の図鑑は容易に入手することはできなかった。私は何とかしてその品種名だけでも分かる図鑑を作りたい。せめて現在各地にある桜だけでも絵に描き残してみたいと思って、昭和40年の春以来、一人こつこつと名桜を捜し求めて、桜を描く旅をはじめた。”とあります。氏は8年間、桜の季節には南から北まで桜を追って描き、その中から「日本桜集」（平凡社）を出版しました。一年に一度、限られた期間にしか咲かない桜を追って描くには大変な苦労があったと思われます。

実は桜の栽培品種には明治期の荒川堤から広まったものも多く、江北村（現在の東京都足立区）の荒川堤は多くの桜品種が植栽された「五色桜」の桜名所として有名になりました。その五色桜も大正から第二次世界大戦にかけて衰退してしまいましたが、現在、地元住民により復興の努力がなされています。

企画展では太田洋愛氏の原画を荒川ゆかりの桜を中心に展示し、太田氏の描いた世界を他の植物画と共に紹介、また荒川堤の五色桜の歴史や、荒川の桜スポットを紹介します。是非お楽しみ下さい。

（研究交流部 森 圭子）



アメリカ



太田桜

12月

12/5/土～12/23/水

企画展「荒川図画コンクール」

6/日 荒川ゼミナール「荒川源流を訪ねて—源流の森林“溪畔林”の自然—」
 講師：比嘉基紀氏
 時間：13：30～15：00 費用：無料（入館料のみ）
 定員：80人（申込順）☎
 内容：荒川源流域に広がる溪畔林の自然環境やその役割などをスライドを使用して紹介します。

12/土 かわはくサタデーミュージアム「クリスマスリースをつくろう」
 時間：14：00～15：30
 費用：100円（材料費）
 定員：32人（申込順）☎
 内容：まつぼっくりなどを使ってオリジナルのクリスマスリースを作ります。

20/日 荒川ゼミナール「荒川中流、北限のミカン園を訪ねて」
 時間：9：30～15：30
 費用：1000円（入園料・保険料）
 定員：25人（申込順）☎
 内容：日本北限のミカンの気候要因と生態について体験します。

23/水～25/金

クリスマスイベント

時間：夕暮れ～17:00

内容：夕方から大水車をはじめ全施設をライトアップ

1月

1/30/土～2/14/日

企画展「川の国埼玉フォトコンテスト展」

5/火 かわはくで遊ぼう「お正月遊び」
 時間：10：00～15：00
 内容：コマまわし、羽子板、たこ揚げ、投扇興などの伝統遊びをします。

17/日 かわはく体験講座「食と環境 北埼玉の伝統食Ⅰ」
 時間：13：00～15：30
 費用：1000円（材料費）
 定員：20人（申込順）☎
 内容：埼玉県北部地域に昔からある食について、楽しみながら体験します。

22/金 荒川ゼミナール「荒川河口を見る」
 時間：13：00～16：00
 費用：100円（保険料）
 定員：30人（申込順）☎
 内容：荒川を船で下りながら、荒川河口付近の構造物や自然を学びます。

23/土 かわはくサタデーミュージアム「光るどろだんご」
 時間：14：00～15：30
 費用：300円（材料費）
 定員：25人（申込順）☎
 内容：光るどろだんご作りに挑戦します。

かわはくで学ぼう!! イベント情報コーナー

2月

2/27/土～3/7/日

企画展「彩の国 環境地図作品展」

14/日 かわはく体験講座「食と環境 北埼玉の伝統食Ⅱ」
 時間：13：00～15：30
 費用：1000円（材料費）
 定員：20人（申込順）☎
 内容：埼玉県北部地域に昔からある食について、楽しみながら体験します。

21/日 かわはくで遊ぼう「科学おもちゃづくり」
 時間：10：30～12：00 14：00～15：30
 費用：200円（材料費）
 定員：各回32人（申込順）☎
 内容：もの作りによって科学への興味を促します。

27/土 かわはくサタデーミュージアム「おひな様づくり」
 時間：14：00～15：30
 費用：100円（材料費）
 定員：32人（申込順）☎
 内容：ひな祭りに合わせておひな様作りに挑戦します。

28/日 荒川ゼミナール「ブータンで川の源流を訪ねて」
 講師：当館職員
 時間：13：30～15：00 費用：無料（入館料のみ）
 定員：80人（申込順）☎
 内容：ブータンヒマラヤの氷河と温暖化についてのお話です。

3月

3/16/火～5/9/日

春期企画展

ポタニカルアート・太田洋愛の桜原画展
—荒川ゆかりの桜を中心に—

14/日 荒川ゼミナール「人と人をつなぎ隔てる世界の川あれこれ」
 時間：13：30～15：00
 費用：無料（入館料のみ）
 講師：下平真弓氏（当館ボランティア）
 定員：80人（申込順）☎
 内容：世界の川を訪ねて日本の川の理解を促します。

20/土 かわはくサタデーミュージアム「かえるの卵をみつけよう」
 時間：14：00～15：30
 費用：100円（保険料）
 定員：25人（申込順）☎
 内容：かわはくの周辺でカエルの卵を探します。

21/日 かわはく春祭り
 時間：10：00～16：00
 内容：各種子供向けイベントを開催予定

28/日 かわはく体験講座「大人の遠足・春のウォーキング」
 時間：9：00～12：00
 費用：100円（保険料）
 定員：20人（申込順）☎
 内容：寄居の町並みと鉢形城、鉢形城のエドヒガンを見ます。

ホームページでも紹介しています!

<http://www.river-museum.jp>

【お願い】①行事は都合により変更になることもあります。ご了承下さい。②☎印のついた行事は事前申込みが必要です。電話またはFAX、Eメールでお申し込みください。③定員になりしだい締め切ります。④川の情報もお寄せ下さい。

編集・発行

埼玉県立川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地

TEL/048-581-8739(研究交流部) FAX/048-581-7332

Eメール/web-master@river-museum.jp



彩の国さいたま

2009年12月24日発行

